

Weiner の達成動機づけに関する 帰属理論についての研究

奈 須 正 裕*

A STUDY OF WEINER'S ATTRIBUTION THEORY OF ACHIEVEMENT MOTIVATION

Masahiro NASU

In achievement motivation research, recent years have witnessed the wide-spread popularity of attributional framework, all due to Bernard Weiner. His theory, however, has been greatly modified and extended by himself as well as criticized in terms of some methodological difficulties and confusions. Also a need to clarify his framework in comparison with other achievement motivation theories using attributional concepts has been felt. This paper reviews Weiner's theoretical advancement and its related studies; it also stretches the methodological problems concerning the measurement of attribution and the definition of some key concepts, while examining the relationship to Rotter's social learning theory and Seligman's learned helplessness theory. Finally, a couple of future research orientations are proposed.

Key words : achievement motivation, attribution theories, expectancy-value models

問 題

近年、達成動機づけに関わる理論の多くがなんらかの形で帰属的概念を導入してきており、帰属理論的アプローチは達成動機づけ研究において大きな位置を占めるにいたっている。帰属理論自体は社会心理学の領域で対人認知研究を中心に発展してきたものであり、Weiner が達成動機づけの分野にこれを持ち込んだと考えられる。したがって、研究史的に見ても Weiner 理論の後続の諸理論、諸研究への貢献・影響は大きく、Weiner 理論についての十分な検討を行っておくことは近年の達成動機づけ研究の動向を整理する上でも重要なことであると言える。

Weiner 理論について、日本ではすでに稲木 (1978)、林・山内 (1978)、細田 (1979)、鈴木 (1982) などのレビューがある。しかしながら、Weiner 自身によって理論の

大幅な修正や発展への試みがなされているほか、諸概念の定義に関する研究者間での不一致や測定法の問題といった研究方法論上の問題点とそこに起因する結果の混乱など、Weiner 理論を取り巻く状況はますます複雑なものとなってきている。また、帰属的概念を用いる他の理論的立場との異同を明確にしておく必要もあろう。そこで、本研究では理論の基本的枠組みの整理に基づき、理論の修正、発展の過程をたどりながら近年の研究の動向を概観するとともに、若干の方法論上の問題点の指摘、他の理論的立場との関係の検討を行い、今後研究を進展させていく上での一助とする。

Weiner 理論の基本的枠組み

Weiner 理論も多くの動機づけの認知的理論と同じく期待×価値モデルをその基礎に持つ。従来の期待×価値モデルでは、期待及び価値がどのような認知的働きから生まれるかについては十分な言及がなされていなかった (細田, 1979) が、Weiner はこの点について Heider

* 東京大学教育学研究科 (University of Tokyo)

TABLE 1 達成行動において認知される原因の分類
(Weiner et al., 1971)

統制の位置	安 定 性	
	安 定	不安定
内 的	能 力	努 力
外 的	課題の困難度	運

(1958) の帰属の概念に着目し、これを動機づけ研究に導入することを考えた。Weiner ら (1971) は、「人は達成に関連した事象の結果を解釈し予測するために帰属の4要素を用いる」として、能力 (ability)、努力 (effort)、課題の困難度 (task difficulty)、運 (luck) をあげ、さらにこれらを特徴づけ、分類するために2つの原因次元 (causal dimension) を設定した (TABLE 1)。1つは Rotter (1966) の統制の位置 (locus of control) の概念に依拠した次元であり、帰属因がその人の内にあるか外にあるかを問題とし、期待×価値モデルの価値に影響を与える次元として考察される。Weiner ら (1971) は価値の具体的内容として、Atkinson (1964) が提唱した誇り (pride) と恥 (shame) の感情を用いる。成功したのは運の良さによると考えるよりも、自分の努力の結果であると考えの方が誇らしさを強く感じるだろうし、失敗を課題のむずかしさに帰属するより、自分の能力不足に帰属する方が恥ずかしさをより強く感じるだろう。そして、後続の達成行動は、成功時に誇りを強く感じるほど促進され、失敗時に恥を強く感じるほど抑制されると考える。もう一方の安定性 (stability) 次元は、帰属因の時間的安定性・変動性に着目した次元であり、期待×価値モデルの期待に影響を与える次元として考察される。同じ成功や失敗をしても、それを安定的要因に帰属するか不安定的要因に帰属するかで、将来の類似課題における成績が今回の成績とどの程度似たようなものとなるか、あるいは異なったものとなるかという期待変動 (expectancy shift) は違ってくる。成功・失敗を能力や課題の困難度のような安定的要因に帰属すると、次回においても事情はあまり変わらないので今回と似たような結果になると期待するだろう。一方、努力や運といった不安定的要因に帰属すると、次回は努力すればよいとか運が変わるだろうと考えられることによって、異なった結果になるかもしれないと期待するだろう。そして、成功を安定的要因に帰属するほど、また失敗を不安定的要因に帰属するほど、後続の達成場面における成功への期待が相対的に高くなり、達成行動が促進されると考えるのである。

このように Weiner 理論では、成功・失敗に対して形成された原因帰属は、その帰属因の各原因次元上での特

徴に応じて、期待や感情に異なった影響を与え、この期待と感情を媒介として後続の行動が決定されると考える。そしてその鍵となるのが原因次元の概念であり、この概念を導入することによって原因帰属と期待及び価値 (感情) を対応づけ、結びつけることができたといっても過言ではなかろう。このような視点に立つと、Weiner 理論の独自性は主に、①原因次元の設定とそれに基づく帰属因の分類 (原因帰属→原因次元の段階)、②各原因次元の特徴に対応した期待及び感情への影響の予測 (原因次元→期待・感情の段階) の2点にあると考えられる。

以下では、原因次元の概念を Weiner 理論の中核的概念としてとらえる立場に立ち、Weiner 理論の中でも、原因次元の設定とそれに基づく帰属因の分類、各原因次元の特徴に対応した期待及び感情への影響の予測の2点に特に焦点をあて、この2点に沿って Weiner 理論をめぐる近年の動向についての概括を行うこととする。

帰属因の分類と原因次元の設定

Weiner 理論において期待、感情と直接結びついているのは原因次元であって、原因帰属は基本的には原因次元を媒介として期待、感情と結びついている。成功を能力に帰属することで誇らしさを感じ、次回も成功できるだろうと期待し得るのは、能力が原因次元上において内的で安定的な特徴を有すると考えられるがゆえのことなのである。したがって、原因帰属を調査することによって、期待や感情、さらには後続の行動を予測するためには、TABLE 1 に表わされた帰属因と原因次元の対応関係が保たれていることが必要条件となるが、この帰属因と原因次元の対応関係を直接的に検討したものは少ない。

Weiner 理論に関する研究においては、被験者に帰属因への帰属を求め、その原因次元上への解釈は研究者が行い、その結果に基づいて様々な仮説を検討するということがしばしばなされてきた (Arkin & Maruyama, 1979; Bernstein, Stephan & Davis, 1979; Luiginbuhl, Crowe & Kahan, 1975; Rosenfield & Stephan, 1978; Stephan, Rosenfield & Stephan, 1976; Zuckerman, Larrance, Porac & Blanck, 1980 など)。そこで用いられてきた典型的な帰属測定法は、能力、努力、課題の困難度、運の4要因の重要度を評定尺度でたずね、TABLE 1 の原因分類にそって、統制の位置 = (能力 + 努力) - (課題の困難度 + 運)、安定性 = (能力 + 課題の困難度) - (努力 + 運) を求め、各原因次元の得点とするというものであった。しかしながら、近年、TABLE 1 で示された帰属因と原因次元の固定的な対応関係に対して疑問が投げかけられてきている。Weiner (1983) によると、次のようなエラーが問題となってきた

いる。

①課題の困難度を不安定的要因とみること：課題の困難度が安定的であるのは、同一、または類似の課題が再現される場合のみである。課題の特徴がその時々によって変化するのであれば、課題の困難度も不安定的要因と見なされるだろう。

②能力を不安定的要因とみること：能力という言葉は、それが適性(aptitude)よりも技能(skill)や知識(knowledge)を暗示する時、不安定的要因とみられやすい。

③努力を安定的要因とみること：努力を怠惰さや勤勉さといった人格変数としてとらえる時、努力は安定的要因としてみられる。

④課題の困難度を内的要因とみること：課題の困難度を能力との相対的な関係でとらえる時、課題の困難度は内的要因としての特徴を含むものとなる。これは Heider (1958) のできる (can) の概念に近い。

さらに, Elig & Frieze (1979) は, 測定されなかった重要な帰属因が原因分類で取り上げられている要因以外にあるかもしれないということを指摘しており, Weiner (1983) も2つの問題点を示している。

①Weiner ら (1971) が提唱した4つの帰属因が, 考え得る原因認知を包括的に表わしていない。帰属測定に自由記述を用いた研究は, Weiner が主に扱った学業達成領域においてさえも, 4要因以外の帰属因が用いられることを示している (Cooper & Burger, 1980)。同様の自由記述研究から Frieze (1976) は, 努力に関して安定的努力 (stable effort) と不安定的な直接的努力 (immediate effort) の2つのカテゴリーをみいだした。また, 樋口ら (1979) は Rotter の統制の位置との関連で Weiner 理論の4要因を検討し, Rotter の powerful others への帰属をどこに位置づけたらよいのか不明であるとしている。

②対象とする領域によっては4つの帰属因がまったく不適切である。投稿論文の受理・拒否 (Crittenden & Wiley, 1980), スポーツでのチームの勝利・敗北 (Lau & Russell, 1980) などの異なった特徴を持った達成領域や, デートの拒否 (Folkes, 1982) のような親和領域, 選挙の当落 (Kingdon, 1967) といった勢力領域のような学業達成以外の領域では, それぞれまったく別な帰属因のリストが必要となってくる。

これらの問題への対処は, 帰属因の特徴づけに用いる原因次元の数を増やし, 分類をより精緻化するという試みによって開始された。Rosenbaum (1972) によると, 努力と気分 (mood) は両方とも内的で不安定的な要因であるがこの2つは明らかに異なるものである。彼はこの違いを説明するために意図性 (intentionality) 次元を考え,

TABLE 2 成功・失敗の認知された原因の3次元分類 (Rosenbaum, 1972)

	意 図 的		無 意 図 的	
	安定	不安定	安定	不安定
内的	自己の安定な努力	自己の不安定な努力	自己の能力	自己の疲労気分・技能のぶれ
外的	他者の安定な努力	他者の不安定な努力	他者の能力・課題の困難度	他者の疲労気分・技能のぶれ・運

TABLE 3 原因の位置・安定性・統制可能性次元の組み合わせによる成功・失敗の認知の決定要因 (Weiner, 1979)

	統 制 可 能		統制不可能	
	安 定	不安定	安 定	不安定
内的	ふだんの努力	一時的な努力	能 力	気 分
外的	教師の偏見	他者の日常的でない援助	課題の困難度	運

努力を意図的要因, 気分を無意図的要因として分類した (TABLE 2)。さらに, 意図性次元の導入により, 教師の指導・援助のような他者の努力の要因を課題の困難度や運と分離して扱うことができるようになった (Weiner, 1974)。また, この原因分類は, 努力や能力をその安定的属性と不安定的属性に分けて扱い得る点でも評価できよう。後に Weiner (1979) は, Rosenbaum がみいだした次元は統制可能性 (controllability) 次元と呼ぶべきものであり, Rosenbaum は次元の命名を誤っていたと指摘している。努力不足に帰属された失敗は, 失敗する意図があった (故意に失敗した) ことを意味するのではない。むしろ, 努力は統制可能, 気分は統制不可能として分類するのが適当であると Weiner (1979) は考えた。同時に Weiner (1979) は, 用語の使用に関する混乱を防ぐために統制の位置次元を原因の位置 (locus of causality) 次元と命名し直した上で, 原因の位置, 安定性, 統制可能性の3次元による原因分類を行った (TABLE 3)。以上のような新たな意味のある原因次元の設定は, 帰属因の特徴のより詳細な記述を可能にするという点で評価できる。しかし, 原因分類がいくら精緻化されたとしても, 対象領域による帰属因リストの違いや帰属因の認知における個人差や状況差には対応しきれない部分があり, なお問題を残すと思われる。

Russell (1982) はこれらの問題の解決のために, 帰属因を用いず, 被験者自身が直接各原因次元に対する原因認知を評定できる尺度 (causal dimension scale: 以下 CDS) を開発した。また, Ronis ら (1983) は, 帰属の「直接的測度 (直接, 被験者に原因次元への帰属を求める)」と「間

接的測度（4つの帰属因の原因分類に基づく上述の測定法）とを、期待との関係で比較した。その結果、両測度間の相関は原因の位置次元では有意であったが、安定性次元では有意ではなかった。さらに、安定性次元について、直接的測度は期待と有意な相関があったが、間接的測度と期待との相関は有意ではなかった。彼らはこの結果から、原因次元という概念そのものの有効性を強調するとともに、原因分類に立脚した帰属測定法を用いた多くの研究が帰属についての十分な検討を提供していないと結論している。

ところで、Weiner が第3の次元として示した統制可能性次元については、概念の定義に関する若干の混乱がみられる。例えば、Forsyth & McMillan (1981) は、被験者に直接に原因次元への評定を求める方法で測定された大学での試験成績への帰属と次回の試験での成功期待及び16の感情評定との関係を検討したところ、感情は成績の高低、原因の位置次元とともに統制可能性次元とも関係があるという結果を得た。定期試験の成績の原因を統制可能であるとした時、よりポジティブな感情を強く感じる事が確認されたのである。彼らの研究は期待についても統制可能性次元の影響を示唆しており、我国でも Weiner 理論に対する反証例としてしばしば引用されてきた（相川ら、1985；宮本、1983）。しかし、Forsyth & McMillan (1981) は、統制可能性次元の測定に際して「原因が自分にとって統制できるか、できないか」を尋ねており、内的な統制可能要因（典型的には努力要因）とそれ以外の要因の対比を求めていると考えられ、Weiner (1979) や Russell (1982) が問題にしているものとは違うものを測定している。Hayamizu (1984) は、11の帰属因について当事者による統制可能性の程度を大学生に評定させたところ、学校での学習態度、自宅での日々の努力、テスト前日の努力の3つの努力要因が非常に統制可能として、また、能力、興味、体調が中程度に統制可能として評定され、外的要因はすべて統制不可能とみられていたことを報告している。Hayamizu (1984) はこの結果に基づき、原因の位置次元と統制可能性次元はオーバーラップしていると結論しており、実際、Forsyth & McMillan (1981) の研究では、両次元間に .409 の相関を得ているが、CDS のように、自分または他者にとっての統制可能性を評定させていれば、両次元はもっと独立したものとなったであろう。Weiner 自身、外的要因が統制可能かどうかは疑問である、という混乱をまねくような記述をしたこともあり（Weiner, 1979）、また統制可能性の用語や概念自体が動機づけ研究の中でしばしば用いられ中心的な役割を果たしている（Bandura, 1977；de-

Charms, 1968；Dweck, 1975；Langer, 1983；Rotter, 1966；Seligman, 1975 など）だけに、Weiner 理論におけるこの概念の意味するところを明確にしておくことは研究を進めるにあたって不可欠なことと言えよう。まとめると、Weiner 理論における統制可能性次元はそもそも Rosenbaum (1972) の意図性次元の概念から生まれたものであり、①当該の行動や結果を統制できるか否かを問うものではなく帰属因の性質に関するものであって、②行為者のみならず教師や家族、友人といった他者にとっての帰属因の統制可能性をも問題にする概念である。

帰属の期待・感情への影響

帰属の期待への影響

期待に関しては、前述のように安定性次元が関係すると考えられる。この仮説を検討した研究は多く、ほぼ一貫して仮説を支持する結果が得られている（Fontain, 1974；McMahan, 1973；Ostrove, 1978；Valle & Frieze, 1976；Weiner, Heckhausen, Meyer & Cook, 1972；Weiner, Nierenberg & Goldstein, 1976 など）。これに対し、Reimer (1975) は、安定な要因である課題の困難度と成功期待との間に予測される関係をみいだせず仮説不支持の証左とした。しかし、Reimer は期待についての問いで、次のよりむずかしい課題において、あなたはどのくらいうまくやれそうかということを探っており、課題の特徴が前回のものと異なっている。したがって、前述のように、課題の困難度は不安定な要因として認知されていた疑いがあり、これが仮説の不支持をもたらしたのかもしれない（Weiner, 1983）。このように、原因帰属→原因次元段階の問題は、後続の諸変数の検討に関して混乱をもたらす危険性をはらんでいる。また、Covington & Omelich (1979) は、大学生を被験者とした調査のパス解析結果から安定性次元への帰属が期待の規定因として重要ではないと反論しているが、再試験希望者を失敗群とみなしており、失敗群の中にも相対的には成功であった者が含まれていた疑いがあり、手続上の問題が残る（広瀬ら、1982）。実際、この点を考慮し、高校生を対象に同様の調査研究を行った相川ら（1985）は、安定性次元と期待との関係をみいだしている。

確かに安定性次元と期待との関係は、従来から Weiner 理論の中で最も明快な実証を伴う部分とされてきた（稲木、1978）。しかし、動機づけに深く関わる他の理論的立場の中にも、期待をその中核にすえ認知論的な理論構築を行いながら、期待の規定因については Weiner とはまた違った説明を行っているものもある。

Rotter (1966) の社会的学習理論では、強化の統制の位

置が内的か、外的かによって期待のあり方が決定されると考える。これに対し、Weiner ら (1976) は、社会的学習理論の研究者が行ってきたスキル課題とチャンス課題による比較は、帰属理論の観点からは能力帰属と運帰属の比較に相当するもので、両者は帰属因の内的・外的次元で異なると同時に安定・不安定の次元でも異なった特徴を有しており、いずれの次元の効果であるかが特定できないとした。Weiner ら (1976) は努力、能力、課題の困難度、運の4要因を用いて、いずれの次元が期待を規定するかを実験的に検討し、安定性次元の影響の方がより強いという Weiner 理論の仮説を支持する結果を得、社会的学習理論を批判した。

このような Weiner の立場は今日でも変わっていないようである (Weiner, 1986) が、ここには2つの問題が潜んでいると考えられる。第1の問題は、Rotter の統制の位置の概念と Weiner の原因次元の両者における内的・外的次元を等価のものとして扱い得るかである。Weiner がこの次元を単に帰属因が行為者の内にあるか外にあるかという帰属因の分類のために用いているのに対し、社会的学習理論では結果が行為者の統制下にあるか否かということ扱う概念として考察される。たとえ「努力」が帰属因として、すなわち「努力すること自体」を、行為者が内的であるとみたとしても、当該事態における結果が「努力」と随伴しており、行為者が「努力」によって結果を自らの統制下に置くことができると認知するかどうかはまた別の問題であろう。内的・外的次元に類似の概念として、人・環境 (Heider, 1958), origin-pawn. (deCharms, 1968), 内発的・外発的動機づけ (Deci, 1980), 内生的・外生的帰属 (Kruglanski, 1975) などがあげられるが、これらは相互にその意味するところが微妙に異なっており、Weiner の用い方とほぼ等価とみなしうるのは Heider のものだけであろう。第2の問題は期待概念を扱う上での焦点の相違である。Weiner 理論では将来における事象の再現性としての期待を問題としているのに対し、社会的学習理論では期待に関連して、自身の行動によってその事象を生起させ得るか否かという結果の統制可能性に着目しており、行動と結果の随伴性としての期待をむしろ重視している。そもそも帰属理論の問題意識は、その対人認知領域での研究からもわかるように、観察された行動や行動の結果が行為者のパーソナリティのような安定した属性に帰属されるか否かという点にあった。同様の行動や行動の結果が繰り返し観察されるならば、それは安定な属性への帰属を生みやすい。逆にいえば、安定した属性に帰属された行動や行動の結果は、それが将来の類似した状況下においても

再現されるであろうという期待を観察者の中に生みやすいといえる。Weiner が理論化にあたり期待と安定性次元を結びつけたのも、このような帰属理論の伝統的な考え方に基づくものと解釈できるであろう。このような Weiner の立場は、無力感についての分析にさらによく表われている。

Weiner & Litman-Adizes (1980) によると、Seligman (1975) の学習性無力感理論では行動と結果の非随伴性を問題にするが、むしろ目標到達への低期待の方が重要な概念である。自分自身の反応によって強化が得られる可能性が増加しなくても、他の人が助けてくれるという知識や、現在の非随伴性を不安定な要因に帰属することで、積極的な関与を維持できるかもしれない。例えば、ボートで川の向こう岸に渡ろうとしている人に何かアクシデントが起こり自分ではどうしようもなくなっても、その時強い風が吹いていれば風がボートを岸まで渡してくれるかもしれないので、彼は希望を持ち続けられるであろう。彼らはこの状態を helpless ではあるが hopeless ではない状態と考える。そして、ネガティブな結果を安定な要因に帰属することによってもたらされる目標到達への絶対的な低期待を感じた時、その人は hopelessness におちいるのである。ここでも Seligman の期待概念が行為者自身の行動による結果の随伴性を指すものであるのに対し、Weiner & Litman-Adizes (1980) は、その結果がたとえ行為者自身の行動と無関係にであっても、高い予測性を持って再現されると考える場合に期待が高いとするのである。

このような内的・外的次元や期待概念に関わる他の理論的立場とのずれについては、これらの理論もまた認知的立場をとる動機づけ理論であり、類似の概念や用語を用いており、Weiner 理論とも関連が深いとみなされるがゆえに、ことさらに注意を要する。

帰属の感情への影響

感情反応に関する Weiner 理論の当初の仮説は次の2つに集約されよう。

仮説1：感情反応は成功・失敗に対して内的帰属がなされた時に最大となり、外的帰属がなされた時最小となる。
仮説2：努力帰属の感情反応に対する影響は能力帰属の影響よりも大きい。

Weiner (1974) は、Nisbett & Schacter (1966), Ross ら (1969), Schacter & Singer (1962), Storms & Nisbett (1970) などを参照し仮説1の論拠の一部としたが、これらはいわゆる錯誤帰属の研究として生理的喚起に関する原因認知の効果を検討したものであり、成功・失敗について仮説を直接に検証したものではない。達成行動を扱

った研究としては、まず Feather (1967) や Meyer (1970) が、運帰属事態に比べて能力帰属事態の方が成功・失敗ともに感情反応が大きいという結果を得たが、能力と運は原因の位置次元で異なると同時に安定性次元上でも異なる特徴を有する帰属因であり、いずれの次元の効果であるかが特定できない。これに対し Reimer (1975) は、成功事態を取り上げ前述の 4 要因について実験を行い、内的帰属の場合に感情反応が大きいことを示した。また、Ruble ら (1976) の第 1 実験でも、6~11 才児について内的帰属をもたらすような条件下において感情反応が大きいことが見いだされている。これらの研究は、帰属の操作や感情の指標などがまちまちであり十分な証左とはいえないが、仮説 1 はそれが直観的にもっともらしいこともあってか、初期においてはあまり批判の対象とはならなかったようである。むしろ、多くの研究者の疑問や批判の声は仮説 2 に集中し、そこでの議論が仮説 1 をも含む理論の修正を促していった感がある。

Weiner & Kukla (1970) は、教師役の被験者に努力、能力及び試験での成績の情報をもとに仮想の生徒に報酬・罰を与えさせるという実験を行い、高い努力は高い能力よりも賞賛され低い努力は低い能力よりも罰せられるという結果を得た。Weiner (1974) はこの結果をもって仮説 2 の証左とした。同様の実験結果は多くの研究で追認されている (Eswara, 1972; Rest, Nierenberg, Weiner & Heckhausen, 1973; Weiner & Peter, 1973; Zander, Fuller & Armstrong, 1972 など) が、次の 2 つの理由で証左として不十分であると考えられる。

①ほとんどの研究が、実際には指標として報酬・罰を用いているが、これらは誇りや恥の感情とは異なると考えられる。

②当事者である生徒が自身を評価する場合と、他者である教師が評価する場合とでは違った結果がもたらされる可能性がある。

これは、Covington & Beery (1976) の self-worth 理論の立場から考えても当然の批判であろう。教師は Weiner の主張するように努力に基づいた評価をするかもしれないが、高努力下での失敗は低能力を暗示することから生徒の self-worth にとっては脅威となる。教師と生徒では、原因帰属の持つ意味合いや効果が違ってくるのである。

また、Nicholls (1976) は、将来の成功が高く価値づけられ、長期的目標に注意がむいているような課題状況では、安定的要因である能力への帰属の方が将来も今回と同じ成功あるいは失敗を予測させるがゆえに、努力帰属よりも感情反応が強くなると主張した。さらに、Sohn

(1977) は、誇りや恥の感情は人が最善を尽くしたか否かを問う道徳的判断に関わる感情であるがゆえに努力帰属との関係が深いのであり、うれしさ (happy) や悲しさ (unhappy) のような道徳的にニュートラルな感情を問題にすれば能力帰属の方が影響が大きいのではないかと考え、仮想場面を用いた実験でこれを実証した。

Weiner (1977) は、Sohn の批判に対するコメントの中で、達成動機研究は誇り・恥の次元で感情を扱ってきたが、達成場面で経験される感情が誇りと恥のみであるという証左はみあたらないとして、それ以外の様々な感情反応をも考察する必要があることを論じた。これを受けて Weiner ら (1978, 1979) は、達成に関連があると思われる感情語のリストを作成し、仮想場面や被験者自身の経験の回想を用いて帰属との関係を検討した。彼らは実験結果から、成功・失敗に対する感情の喚起には 3 つの位相があるとして、先の仮説を修正、発展させていった (Weiner, 1979; Weiner, Russell & Lerman, 1979)。まず第 1 の位相では、結果の原因に関係なく主観的な成功・失敗の判断にそってうれしさや落胆 (disappointed) の感情が喚起される (結果依存の感情) が、この感情喚起は短期的なものである。つづく第 2 の位相では、人はその結果の原因を問い、なされた帰属によって様々な異なった感情を感じる。同じ成功でも能力に帰属すれば有能感を感じるが、運がよかったのだと思えばおどろき (surprise) を感じ、他者のおかげだと考えれば感謝 (gratitude) の気持ちが起こるのである。さらに第 3 の位相では、なされた帰属が原因次元内に分類され、各次元の特徴に対応した感情が喚起される。内的帰属は、成功時には誇りや有能感、失敗時には恥といった自尊感情 (self-esteem) に関わる感情をもたらす。これら原因次元に関連した感情は最も長く感じられ続けると彼らは考えた。さらに、取り扱う感情を増やしたことにより、当初から感情との関係が指摘されてきた原因の位置次元のみならず、統制可能性次元や安定性次元も特定の感情反応に影響することが研究を通して明らかになってきた (Weiner, 1980a, 1980b, Weiner & Litman-Adizes, 1980; Weiner, Graham & Chandler, 1982 など)。両原因次元と感情反応の関係は以下のように整理できよう。

怒り (anger)：怒りは、自己のネガティブな結果を他者にとって統制可能な要因に帰属した時に経験される。例えば、騒がしいルームメイトによって勉強をじゃまされた場合がそうである。また、怒りは他者のネガティブな結果が、当人にとって統制可能な状況下で引き起こされたことが観察された時にも喚起される。教師が生徒を最もきびしく叱るのは、生徒が努力不足の末に失敗した

場合である。

感謝：感謝は、自己のポジティブな結果を他者にとって統制可能な要因に帰属した時に経験される。人は指導や援助に感謝の気持ちを感じるが、もしそれがその人の意志とは関係のない、なんらかの強制からなされたものであれば、感謝の気持ちは相対的に起こりにくい。

うしろめたさ (guilt)：うしろめたさの感情は、自分にとって統制可能な要因によってネガティブな結果を得た時に経験される。不十分な努力ゆえの失敗はうしろめたさの感情を引き出す。

あわれみ・同情 (pity, sympathy)：あわれみの感情や同情の念は、他者が統制不可能な条件のゆえに援助を必要としている、あるいはネガティブな状態にあるのを見た時に喚起される。他者のネガティブな結果に対する原因の統制可能性は、その結果が怒りを引き出すか、あわれみや同情を引き出すかに影響する。人は目の病気のゆえに講義のノートをとれなかった学生に対して同情し、自分のノートを貸すという援助行動を起こしやすいが、海に遊びにいていたことが原因の学生には怒りをおぼえることさえあり、援助は差し控えられる (Weiner, 1980b)。また、あわれみや同情は、ネガティブな状態をもたらした原因が安定的で永続的な場合、より強く喚起される。人は、一時的に目の病気にかかっている人に対してよりも、盲人に対してよりあわれみを感じる。

絶望感 (hopelessness)・あきらめ (resignation)：絶望感とあきらめは、ネガティブな結果を安定な要因に帰属した場合に引き出される。

なお、恥の感情と原因帰属との関係については論争があり (Covington & Omelich, 1934; Brown & Weiner, 1984)、その結果、恥には失敗時の無能力を恥じる屈辱感 (humiliation) と努力不足を恥じるうしろめたさの2側面があり、失敗に対する能力帰属、努力帰属とそれぞれに結びついていることが分かってきた。Weiner & Kukla (1970) や Sohn (1977) が問題にした恥の感情は、ここでいううしろめたさの側面だったのである。

McFarland & Ross (1982) は、この修正された仮説を検証すべく、実験的に帰属 (能力と課題の困難度) を操作し感情との関係を検討した。その結果、自尊感情に関わる感情は帰属の影響を強く受けており、Weiner が結果依存の感情と呼んだものは結果の成功・失敗によって主に規定されていたが、同時に帰属の影響も認められた。仮想場面を用いて実験を行った Russell & McAuley (1986) も、帰属因への帰属及び CDS によって測定された3つの原因次元がそれぞれに感情反応に関係していることを示したが、ここでも結果依存の感情に帰属の影響が認め

られた。このように、成功・失敗に対する感情喚起の3つの位相の間の区分は、実際にはやや不明瞭のようである。また、各位相の時間的順序に関する研究は見当たらず、この点でも問題を残しているといえよう。

以上のように、帰属と感情の関係については、当初の仮説に対し大幅な修正と発展の試みがなされてきた。このことは結果的には、感情喚起に対する帰属的アプローチのための、より拡張された枠組みを提供したという点において評価できよう。また、この理論の修正にともなう、近年 Weiner は行動の規定因としての感情の役割を強く強調してきている (Weiner, 1980c)。

まとめと展望

以上の Weiner 理論をめぐる近年の研究の動向の整理に基づいて、今後の研究に求められる点を列挙し、まとめとする。

まず、帰属因の分類と原因次元の設定に関して、Weiner ら (1971) が示した4要因が必ずしも十分な原因認知の候補とはいえないこと、帰属因と原因次元との対応関係は変動的なものであることが示された。したがって、帰属因への帰属となんらかの変数との関係を調査し、得られたデータから、原因次元の枠組みを用いた post hoc な説明を行うといったことは差し控えられるべきであろう。CDS のような帰属因によらない測定法は、この点に関しては有用性が高いが、努力、能力といった方がやはり答えやすいだろうし、CDS のような質問形式を低い年齢の子どもに用いることは困難であると思われる。このことを考慮すると、ある事態で用いられる帰属因をあらかじめ自由記述で抽出しておき、帰属因間の関係や構造を因子分析などを用いて検討し、その帰属因の位置づけを明確にした上で研究を進めていくというやり方も推奨できると思われる。しかし、Weiner 理論で示されているような、まず帰属因への帰属がなされ、それが原因次元上に位置づけられていくといった時間的順序も実証を伴わない仮説にすぎず、まずその結果が内的なものにかによってもたらされたか、外的なものにかによってもたらされたかを考え、その後能力とか努力とかいった言葉をラベルとして付与しているのかもしれない。帰属因による測定法と原因次元へ直接に帰属を求める測定法の双方が測っているものを明確にするためにも、帰属過程に関するより詳細な研究が望まれる。また、CDS のような測定法の背景には、帰属因と原因次元の対応関係の変動をエラーとみる発想があると考えられるが、これとは逆に各帰属因のもつ意味や帰属因間の関係の人や状況の違いによる変化に着目することにより、評価の与えら

れ方や他者との関係といった社会的な要因をも含み込んだ研究を進めていこうという動きもあり (Dweck, 1983; Nicholls, 1984), 興味をもたれる。

次に、帰属の期待への影響については、再現性としての期待に関する限り、Weiner 理論の仮説はおおむね支持されてきたといえる。しかし、Weiner が Rotter や Seligman に対して行った指摘は、期待概念に関連して着目している点が相互に異なり、適切なものとは言いがたい。なお、いずれの観点にそった研究が望まれるかといったことについて結論を出すことはできないが、たとえ再現性としての期待が高くても、随伴性としての期待が低ければ行動が促進されるとは考えにくいことから、行動の規定因としては随伴性としての期待を考える方が適当であろう。また、教育的介入の可能性から興味を持たれる再帰属法についても、再現性としての期待を扱う Weiner 理論の立場からすると、努力帰属や方略帰属とともに運帰属も不安定な要因への帰属として適応的な帰属といえるが、随伴性としての期待を扱う立場からは運帰属は結果的には自らの行動が結果を統制しているという認知が得られず、学習行動の改善ということを考えるとあまり望ましい指導とは思われない。

一方、帰属の感情への影響については、理論の大幅な修正がなされてきたが、なお不明瞭な部分を多く残している。若干の問題点は先に指摘したが、それらに加えて日米の文化や言葉の違いを考慮した研究が今後に望まれる。Weiner ら (1978, 1979) が示した感情語が日本語のどの言葉にあたるのか、また文化の違いによって帰属と感情との結びつきにどのような違いがあるのかといったことがまず検討されなければならない。

ところで、Weiner 理論が達成動機づけに関する理論である以上、理論の有効性に関する議論においては、その達成行動に対する予測性の高さという問題を避けて通ることはできないであろう。Weiner 理論の基本的枠組みの中では、行動は帰属のあり方に規定された期待及び感情によって決定されると考える。しかし、期待及び価値(感情)が行動を決定するという点自体は、ひとり Weiner 理論のみが独自に主張するところではなく、期待×価値モデルに立脚する多くの動機づけ理論が共通に含む一般的仮定である。そのようなこともあってか、Weiner 理論に関する実証的研究は、先行する結果→原因帰属→原因次元→期待・感情までの過程に集中しており、後続の行動までを含めて理論全体を包括的に検証した研究は少ない。Weiner & Sierad (1975) や広瀬ら (1982) による実験室的研究、Covington & Omelich (1979) や相川ら (1985) による学校の定期試験を用いた調査的研究など

が主要なものであるが、期待と行動との関係については比較的一貫して理論を支持する結果が得られているのに対し、感情の影響については明確な結果が得られていないのが現状である。また、Weiner ら (1978, 1979) は達成場面で喚起される感情は誇りと恥ばかりではないとして達成に関連した多くの感情を示したが、これらが後続の行動をどのように規定しているかについては十分な検討がなされてきているとは言いがたい。この点に関して Weiner 自身が行ってきた研究の多くは援助行動を扱っており、方法論的にも仮想場面のシナリオを読ませて自分ならばどう行動すると思うかをたずねるといったもの (Weiner, 1980a, 1980b) で、実際の行動を検討したものではなく証左として不十分であると思われる。実際になんらかの達成課題を遂行させ、そこでの成功・失敗の経験及びそれに対する帰属に基づいて喚起された様々な感情のそれぞれがどのように後続の達成行動に影響していくかを詳細に検討していくことが今後の研究に望まれる。

本論では、Weiner 理論の独自性を主にその原因次元概念の導入に求める立場に立ち、Weiner 理論をめぐる近年の動向について概括を行ってきた。原因次元の概念を用いることにより、原因帰属の期待・感情への影響に関する理論的予測が可能となり、原因帰属を期待×価値モデルの認知的働きとして明確に位置づけることができたのである。そして実際、被験者に直接に原因次元への帰属を求める帰属測定法を用いた研究 (Ronis ら, 1983; Russell & McAuley, 1986 など) が示唆しているように、原因次元の概念は後続の諸変数の予測に関して有効な概念であると考えられる。動機づけ研究の領域において、帰属的概念に次元的観点を導入している理論は他にも見受けられる (deCharms, 1968; Kruglanski, 1975; Rotter, 1966 など) が、多くは単一の次元を想定しており、帰属をその各後続変数への影響という観点から多次元的に取り扱っていかうとする Weiner のアプローチは、動機づけ研究に帰属的概念を導入するにあたり、より幅の広い枠組みを提供し、多くの研究の可能性を示唆したという意味においても評価できよう。後続の他の理論の中にも Weiner の原因次元概念の導入というアイデアを参考にしていると考えられるものがある。例えば Abramson ら (1978) は学習性無力感理論の改訂にあたって帰属の考え方を導入しているが、その中で非随伴経験を内的・外的、安定的・不安定的、全般的・特殊的の3次元上にどのように帰属するかによって、それぞれ自尊感情の低下の程度、もたらされる症状の慢性化の程度、症状の般化の程度が左右されるとしており、Weiner が示した多次元的

アプローチの影響が感じられる。このように、Weiner 理論における原因次元概念の導入は、多くの理論的、実証的研究を導いた点において高く評価されるべきものであると考えられる。

近年の動機づけ研究においては、多くの研究者が自己の理論の中に様々な形で帰属的概念を位置づけ研究を進めている。そのような中であって、Weiner 理論は先駆的役割を果たしたといえるが、統制可能性概念や内的・外的次元、期待概念についての検討からも分かるように、いくつかの理論的立場とはやや趣を異にする部分もあり、研究にあたってはそれぞれの概念の意味するところの違いに注意する必要がある。また、このような諸概念に関する他の理論的立場との比較からも示唆されるように、Weiner 理論は、帰属的概念を用いる多くの動機づけ理論の中であって、Heider (1958) に端を発する帰属理論の伝統を最も着実に継承した理論の1つであると考えられる (Shaw & Costanzo, 1982)。そして、このこととの関連で留意すべきは、Weiner 理論もまた、伝統的な帰属理論の多くが含み込んでいる理論構成上の重要な前提、すなわち科学者のように因果推論を行う論理的・合理的人間観の上に構成されているということであろう。これは Weiner 理論を教育研究に適用していく時、特に大きな問題を生み出す。認知的成熟が不十分な児童に対しては大人と同様の論理的・合理的な因果推論が可能であるとして研究を進めていってよいかが問われるのである。これに関連して速水 (1984) は、原因推測の情報処理様式や原因帰属と自尊感情の結びつきの発達的变化を検討し、小学校5年生以下の児童では Weiner 理論がその前提としているような認知的成熟にまだ十分達していないことを示した。さらに速水・佐藤 (1984) は、テスト成績の原因について個別面接で自由応答法により質問したところ、小学校5年生の児童の中にも原因に関して全く答えられない者がいたことを報告しており、小学生に原因帰属は可能かという問題にまで立ち帰ってみる必要のあることを示唆している。近年、小学生を対象として学業成績への原因帰属と期待・感情、さらに学習行動、成績などとの関連を検討した研究が盛んになされてきている (例えば、樋口ら, 1983; 竹村ら, 1982) が、研究の実施及び結果の解釈において、これらの点が十分に考慮されていかなければならないであろう。

なお、本論は達成動機づけ研究の分野における Weiner 理論の検討を主な目的としたので特に取り上げなかったが、近年 Weiner (1980a, 1980b, 1986) は、達成以外の領域、特に援助行動の研究において自身の理論の適用を試みており、合わせて興味を持たれるところである。

引用文献

- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P. & Teasdale, J.D. 1978 Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49—74.
- 相川 充・川島勝正・松本卓三 1986 原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響—Weiner の達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討—教育心理学研究, **33**, 195—204.
- Arkin, R.M., & Maruyama, G.M. 1979 Attribution, affect, and college exam performance. *Journal of Educational Psychology*, **71**, 85—93.
- Atkinson, J.W. 1964 *An introduction to motivation*. Van Nostrand.
- Bandura, A. 1977 Self-Efficacy: Toward a unifying theory of human behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191—215.
- Bernstein, W.M., Stephan, W.G., & Davis, M.H. 1979 Explaining attributions for achievement: A path analytic approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1810—1821.
- Brown, J., & Weiner, B. 1984 Affective consequences of ability versus effort ascriptions: Controversies, resolutions, and quandaries. *Journal of Educational Psychology*, **76**, 146—158.
- Cooper, H.M., & Burger, J.M. 1980 How teachers explain students' academic performance. *American Educational Research Journal*, **17**, 95—109.
- Covington, M.V., & Beery, R. 1976 *The motive for self-worth*. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Covington, M.V., & Omelich, C.L. 1979 Are causal attributions causal? a path analysis of the cognitive model of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1487—1504.
- Covington, M.V., & Omelich, C.L. 1984 Controversies or consistencies? a reply to Brown and Weiner. *Journal of Educational Psychology*, **76**, 159—168.
- Crittenden, K.S., & Wiley, M.G. 1980 Causal attribution and behavioral response to failure. *Social Psychology Quarterly*, **43**, 353—358.
- deCharms, R. 1968 *Personal causation: The inter-*

- nal affective determinants of behavior.* New York : Academic Press.
- Deci, E.L. 1980 *The psychology of self-determination*, Lexington, Mass. : D.C. Heath (Lexington Books).
- Dweck, C.S. 1975 The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 674—685.
- Dweck, C.S. 1983 Theories of intelligence and achievement motivation. In Paris, S., Olson, G., & Stevenson, H. Eds., *Learning and motivation in the classroom*. Hillsdale, New Jersey : Erlbaum.
- Elig, T.W., & Frieze, I.H. 1979 Measuring causal attributions for success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 621—634.
- Eswara, H.S. 1972 Administration of rewards and punishment in relation to ability, effort and performance. *Journal of Social Psychology*, 87, 139—140.
- Feather, N.T. 1967 Valence of outcome and expectation of success in relation to task difficulty and perceived locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 7, 372—386.
- Folkes, V.S. 1982 Communicating the reasons for social rejection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 235—252.
- Fontain, G. 1974 Social comparison and some determinants of expected personal control and expected performance in a novel task situations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 487—496.
- Forsyth, D.R., & McMillan, J.H. 1981 Attributions, affect, and expectations : A test of Weiner's three-dimensional model. *Journal of Educational Psychology*, 73, 393—403.
- Frieze, I.H. 1976 Causal attributions and information seeking to explain success and failure. *Journal of Research in Personality*, 10, 293—305.
- Hayamizu, T. 1984 Changes in causal attributions on a term examination : Causal dimensions. *Japanese Psychological Research*, 26, 1—11.
- 速水敏彦 1984 学業成績についての原因帰属の推測過程の発達 教育心理学研究, 32, 256—265.
- 速水敏彦・佐藤栄一 1984 学業成績の原因帰属 —小
学生に原因帰属は可能か— 大阪教育大学紀要, 第IV部門, 33, 15—23.
- 林 保・山内引継 1978 達成動機の研究 誠信書房
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York : Wiley.
- 樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦 1979 Locus of Control に関する文献的研究 東京工業大学人文論叢, 5, 95—132.
- 広瀬幸雄・石井徹・木村昌幸・北田 隆 1982 達成動機と原因帰属がパフォーマンスに及ぼす効果 実験社会心理学研究, 22, 27—36.
- 細田一秋 1979 達成行動における原因帰属理論 宮本美沙子編著 達成動機の心理学 金子書房
- 稲木哲郎 1978 Weiner の達成動機づけ理論について 心理学評論, 21, 110—126.
- Kingdom, J.W. 1967 Polititians' beliefs about votes. *American Political Science Review*, 61, 137—145.
- Kruglanski, A.W. 1975 The endogenous-exogenous partition in attribution theory. *Psychological Review*, 1975, 82, 387—406.
- Lau, R.R., & Russell, D. 1980 Attribution in the sports pages : A field test of some current hypotheses in attribution research. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 29—38.
- Luginbuhl, J.E., Crowe, D.H., & Kahan, J.P. 1975 Causal attribution for success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 86—93.
- Langer, E. 1983 *The psychology of control*, Beverly Hills. CA : Sage.
- McFarland, C., & Ross, M. 1982 Impact of causal attributions on affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 937—946.
- McMahan, I.D. 1973 Relationships between causal attributions and expectancy of success. *Journal of Personality and Social Psychology*, 28, 108—114.
- Meyer, W.U. 1970 Selbstverantwortlichkeit und leistungsmotivation. Unpublished Ph. D. dissertation. Ruhr Universität, Bochum, Germany. cited in Weiner, B. 1972 *Theories of motivation : From mechanism to cognition*. Markham.
- 宮本美沙子 1983 達成動機と原因帰属—「やる気」の要因—サイコロジ, 39—6, 20—25.

- Nicholls, J.G. 1976 Effort is virtuous, but it's better to have ability : Evaluative responses to perceptions of effort and ability. *Journal of Research in Personality*, 10, 306—315.
- Nicholls, J.G. 1984 Conceptions of ability and achievement motivation. In Ames, R.E., & Ames, C. eds., *Research on motivation in education*. vol. 1, *Student motivation*, Academic Press.
- Nisbett, R.E., & Schacter, S. 1968 Cognitive manipulation of pain. *Journal of Experimental Social Psychology*, 2, 227—236.
- Ostrove, N. 1978 Expectations for success on effort-determined tasks as a function of incentive and performance feedback. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 909—916.
- Reimer, B.S. 1975 Influence of causal beliefs on affect and expectancy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 1163—1167.
- Rest, S., Nierenberg, R., Weiner, B., & Heckhausen, H. 1973 Further evidence concerning the effects of perceptions of effort and ability on achievement evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 28, 187—191.
- Ronis, D.I., Hansen, R.D., & O'Leary, V.E. 1983 Understanding the meaning of achievement attributions : A test of derived locus and stability scores. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 702—711.
- Rosenbaum, R.M. 1972 A dimensional analysis of the perceived causes of success and failure. Unpublished Ph. D. dissertation, University of California, Los Angeles. cited in Weiner, B. 1974.
- Rosenfield, D., & Stephan, W.G. 1978 Sex differences in attributions for sex-typed task. *Journal of Personality*, 46, 244—259.
- Ross, L., Rodin, J., & Zimbardo, P.G. 1969 Toward an attribution therapy : The reduction of fear through induced cognitive-emotional misattribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, 12, 279—288.
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, (1, Whole No. 609).
- Ruble, D.N., Parsons, J.E., & Ross, J. 1976 Self-evaluative responses of children in an achievement setting. *Child Development*, 47, 990—997.
- Russell, D. 1982 The causal dimension scale : A measure of how individuals perceive causes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 1137—1145.
- Russell, D., & McAuley, E. 1986 Causal attributions, causal dimensions, and affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1174—1185.
- Schacter, S., & Singer, J.E. 1962 Cognitive, social and psychological determinants of emotional state. *Psychological Review*, 69, 379—399.
- Seligman, M.E.P. 1975 *Helplessness : On depression, development and death*. San Francisco : Freeman.
- Shaw, M.E. & Costanzo, P.R. 1982 *Theories of social psychology*, 2nd ed. McGraw-Hill.
- Sohn, D. 1977 Affect-generating powers of effort and ability self attributions of academic success and failure. *Journal of Educational Psychology*, 69, 500—505.
- Stephan, W.S., Rosenfield, D., & Stephan, C. 1976 Egotism in males and females. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 1161—1167.
- Storms, M.D. & Nisbett, R.E. 1970 Insomnia and the attribution process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 400—408.
- 鈴木康平 1982 達成動機と帰属 心理学評論, 25, 278—292.
- 竹村 健・藤田 正・玉瀬耕治 1982 小学生における学業成績の原因帰属 奈良教育大学教育研究所紀要, 19, 105—114.
- Valle, V.A., & Frieze, I.H. 1976 Stability of causal attributions as a mediator in changing expectations for success. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 579—587.
- Weiner, B. 1974 *Achievement motivation and attribution theory*. Morristown, New Jersey : General Learning Press.
- Weiner, B. 1977 Attribution and affect : Comments on Sohn's critique. *Journal of Educational Psychology*, 69, 506—511.
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational*

- Psychology*, 71, 3—25.
- Weiner, B. 1980a A cognitive (attribution)—emotion-action model of motivated behavior: An analysis of judgments of help-giving. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 186—200.
- Weiner, B. 1980b May I borrow your class notes? An attributional analysis of judgments of help giving in an achievement-related context. *Journal of Educational Psychology*, 72, 676—681.
- Weiner, B. 1980c The role of affect in rational (attributional) approaches to human motivation. *Educational Researcher*, 9, July-August, 4—11.
- Weiner, B. 1983 Some methodological pitfalls in attributional research. *Journal of Educational Psychology*, 75, 530—543.
- Weiner, B. 1986 *An attributional theory of motivation and emotion*. New York. Springer-Verlag.
- Weiner, B., Frieze, I.H., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R.M. 1971 Perceiving the causes of success and failure. In Jones, E.E., Kanouse, D. Kelley, H.H., Nisbett, R.E., Valins, S., & Weiner, B. Eds., *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. New Jersey: General Learning Press.
- Weiner, B., Graham, S., & Chandler, C.C. 1982 Pity, anger, and guilt: An attributional analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 226—232.
- Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W.U., & Cook, R.E. 1972 Causal ascriptions and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 239—248.
- Weiner, B., & Kukla, A. 1970 An attributional analysis of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 1—20.
- Weiner, B., & Litman-Adizes, T. 1980 An attributional expectancy-value analysis of learned helplessness and depression. In Garber, J., & Seligman, M.E.P. eds., *Human helplessness*. New York: Academic Press.
- Weiner, B., Nierenberg, R., & Goldstein, M. 1976 Social learning (locus of control) versus attributional (causal stability) interpretations of expectancy of success. *Journal of Personality*, 44, 52—68.
- Weiner, B., & Peter, N. 1973 A cognitive developmental analysis of achievement and moral judgments. *Developmental Psychology*, 9, 290—309.
- Weiner, B., Russell, D., & Lerman, D. 1978 Affective consequences of causal ascriptions. In Harvey, J.H., Ickes, W.J., & Kidd, R.F. eds., *New directions in attributional research*. vol. 2. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Weiner, B., Russell, D., & Lerman, D. 1979 The cognition-emotion process in achievement-related contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1211—1220.
- Weiner, B., & Sierad, J. 1975 Misattribution for failure and enhancement of achievement strings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 415—421.
- Zander, A., Fuller, R., & Armstrong, W. 1972 Attributed pride or shame in group and self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 23, 346—352.
- Zuckerman, M., Larrance, D.T., Porac, J.F.A., & Blanck, P.D. 1980 Effects of fear of success on intrinsic motivation, causal attribution, and choice behavior. *Journal of Personality and Social Psychology* 39, 503—513.

(1988年1月18日受稿)